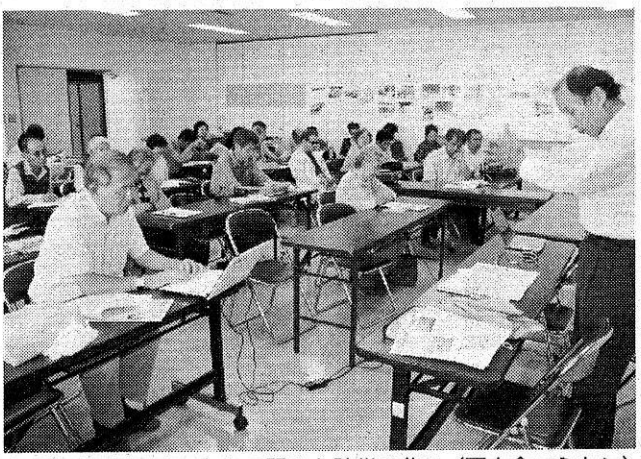
堤防下の浸透水に警鐘

西小倉で防災の集い

「28年水害」から57年

宇治川の構造的な宿命に聞き耳

防災を考える市民の会（志岐常正代表）主催の「防災の集い」が、25日に宇治市の西小倉コミセン（小倉町南堀池）で開かれ、台風13号の大雨で宇治川堤防が決壊した昭和28年（1953）9月25日から57年を迎えた「28災メモリアル企画」として水害に備えた都市の防災について意見を交わした。



「28災メモリアル」として開いた防災の集い（西小倉コミセン）

集いでは開沼淳一・一国土問題研究所理事が「昭和28年大水害と元・巨椋池地域の防災の重要点」、濱岡洋史・宇治市危機管理課長が「昭和28年大水害の教訓と市の防災対策の現状」をテーマに井川の河川改修事業など現況の治水対策をベースに防災事業の現況を基調報告した。

このうち開沼さんは伏見城の築城に呼応して豊臣秀吉が宇治川に「太閤堤」を築堤し、宇治川の流れを人為的に迂回させた歴史的な背景から宇治川や巨椋池、古川などの河床の高さを比較し、築堤後の宇治川を「自然摂理に反した人工河川になった」と指摘。

太閤堤ができるまでは宇治川の水害に関する記録がないことを押さえ、太閤堤が完成してからなぜ水害が多くなってきたのかを科学的に検証。

太閤堤が造られるまでは大水の時にジワジワと水位が上がる自然の水位調整が繰り返され、人命を奪い、建物を壊すような水害にはならなかったことをわかりやすく説明。

枝分かれした宇治川の流れから巨椋池に水が流れ込んでいた自然地形を人為的に操作し、島と島をつなげて太閤堤が築造されることで堤防の下の流れが大水などの際に頭をもたげ、堤防の上に水があふれる越流ではなく、堤防の下から水が出て決壊する特徴を持っている川であることをしっかり理解しておく必要があると指摘。

1964年の天ヶ瀬ダムの完成で宇治川の河床低下が進んでおり、堤防の下を流れる浸透水（元の河道）が心配。かなり高い矢板で堤防下を補強する必用があり、予算的にはかなりの経費がともなうが、きっちりとした矢板での補強が不可欠――と強調。

ポンプによる内水排除は水が貯まらないと使えず、勾配も少ないため、時間が係るとして、想定外の大雨などに対処するためには避難経路の確保などの徹底が不可欠として、専門家の立場から警鐘を放った。

【岡本幸一】